

第1節 位置・面積

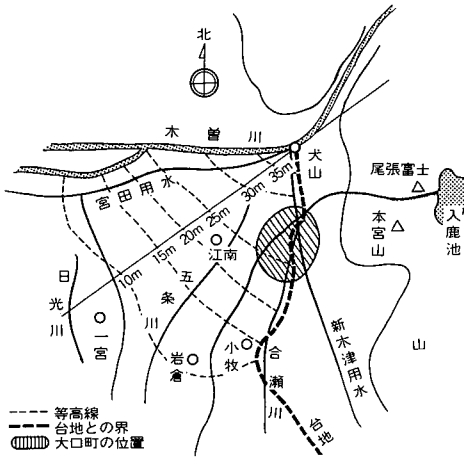


図1-1 犬山扇状地

第一章 位置・面積・地形・地質

第一節 位置・面積

概況

本町は愛知県丹羽郡大口町と称し江戸時代には余野・小口・外坪・河北・大屋敷・秋田・豊田などの村落に分かれていたが、明治三年（一八八九）富成村、小口村、太田村に合併した。明治三九年（一九〇六）この三村が合併して大口村となり、昭和三七（一九六二）町制施行。現在に至っている。

東西三・六キロメートル、南北六・一キロメートル、木曾川沖積層上の細長い地形で、扇頂を犬山にもち、扇端の一宮にいたる犬山扇状地の東南部に位置している。最近までは、主として米・麦・養蚕を中心とした生産が行われ純農村的色彩が強かったが、小牧市に高速道路のインターチェンジができ国道四一号线が町内を通過して、大きな変容をとげた。昭和三三年（一九五七）から工場誘致が始められ、繊維、

金属、機械の工場七五社が進出した。現在では各所に工場が散在し、第二種兼業農家が九〇パーセント近くを占め工業化が著しいが、住宅地、工場の間に田畑が点在し、大きな市街地はない。

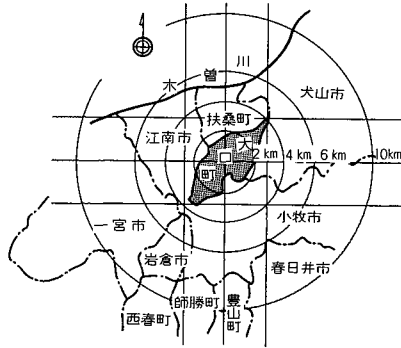


図1-2 位置

位置
扶桑町、北西から西は江南市に接している。
大口町は愛知県の西北部にあたり、犬山扇状地の東南部に位置する。その四囲は、北東に犬山市、南から南東に小牧市、北は

その数理的 position は、大口町役場所在地の下小口七丁目一五五番地において、東経一三六度五三分五四秒、北緯三五度一九分四四秒である。そして、四極の東西は、

東経一三六度五六分二六秒の東端に起り、東経一三六度五二分〇秒の西端に尽きる。南北は、北緯三五度一八分九秒の南端に始まり、北緯三五度二一分二一秒の北端に終わる。

この大口町に立って北方を眺めると、各務原台地が西にのび、濃尾平野にのこされた残丘の一つをここに見ることができる。

さらに東へ目を転じていくと、恵那山(二、一九〇メートル)の山々と、冬

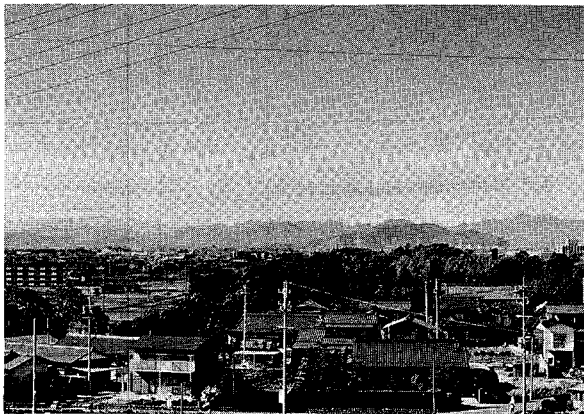


図1-3 中心地から北方の美濃山系をのぞむ

一部といわれている。
西方を眺めると、北から南へかけて、伊吹山脈、養老山脈、鈴鹿山脈の山々が連なり、冬になると山の頂を雪で覆った峯々を、遙かに望見することができる。

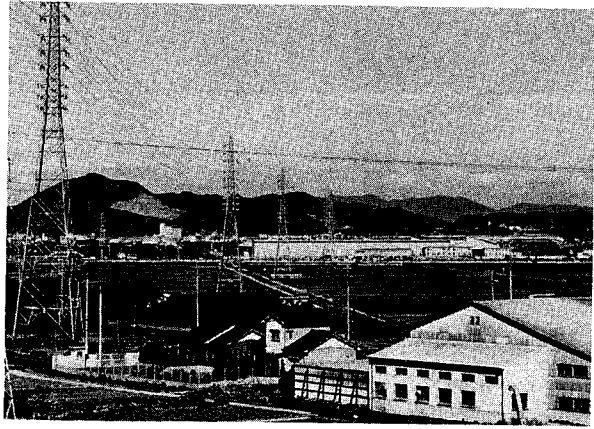


図1-4 中心地から尾張丘陵をのぞむ

期には一段と高く雪をいただく御岳(三、〇六三メートル)の山容を望むことができる。

東方を眺めると、尾張富士、本宮山、白山の尾張三山を望見することができる。

これは古生層の山丘で、標高も三〇〇メートルくらいであって、地質上からは、東濃山地南西の端と考えられる。

南方を見ると、小牧山を手に近に見ることができる。小牧山は標高八五・七メートルの孤立する丘陵で、これは、尾張平野陥没の時残った山頂の

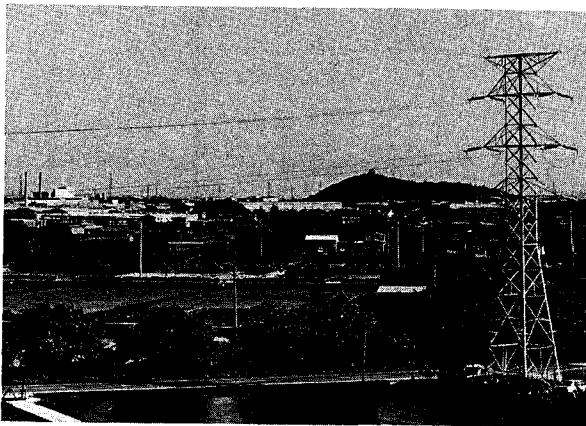


図1-5 中心地から小牧山をのぞむ

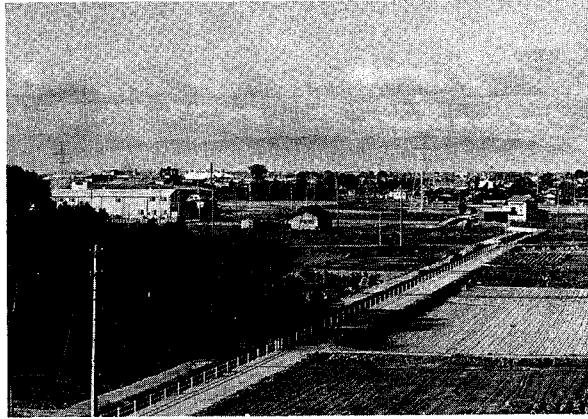


図1-6 中心地から西方の養老山系をのぞむ

積に対する耕地面積のしめる割合は非常に高く、耕地のうち田と畑との比は五対二となっており、水田の多い町である。

面積

大口町は東西約三・六キロメートル、南北約六・一キロメートルの木の葉形で、総面積は一三・五五平方キロメートルである。

耕地は田が五二三・六ヘクタール、畑が二二九・四ヘクタールで、全体の五四・八パーセントを占めている。宅地は三〇五・三ヘクタールで全体の二二・五パーセント、雑種地、その他合計で三〇六・七ヘクタールの二二・六パーセントにすぎない。これからみると総面積

表1-1 土地の推移 (町資料による) 単位: ha

年次	田	畑	宅地	その他	合計
明治8年	540.8	326.3	77.6	8.3	954.0
大正10年	679.2	319.0	81.8	1.9	1,081.9
昭和8年	723.0	344.8	90.5	2.3	1,160.6
◇ 28	716.6	349.0	94.7	2.2	1,162.5
◇ 30	711.4	348.9	95.0	2.8	1,158.1
◇ 40	707.0	295.1	151.8	21.9	1,175.8
◇ 45	638.1	270.8	236.3	23.0	1,168.2
◇ 50	600.0	247.0	294.0	23.0	1,164.0
◇ 52	523.6	224.7	298.0	47.7	1,095.0

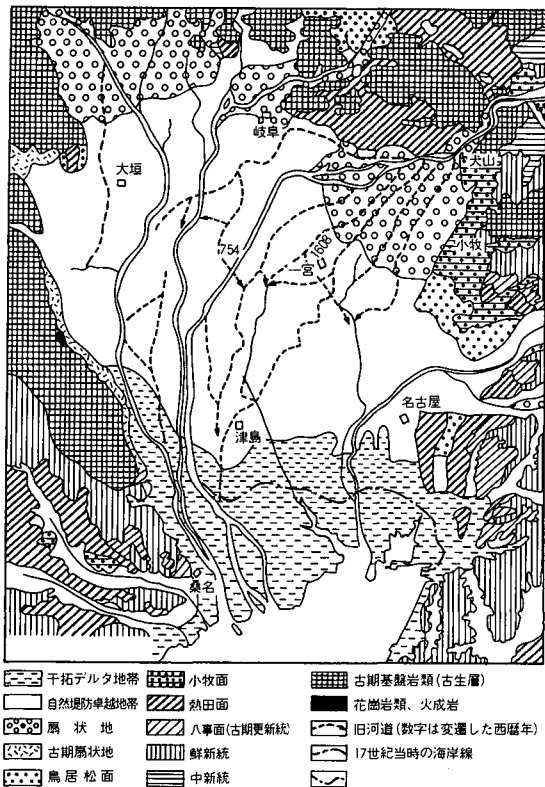


図1-7 濃尾平野地形分類図

地形

第二節 地形・地質

大口町は犬山扇状地の東南部にある。犬山扇状地はわが国でも有数の大きさのもので、扇頂を犬山城(古生層の孤立山地上にある)の西麓にもち、扇端は西縁の岐阜市の市街地東北部を経て、南限

の岩倉市におよぶ一五キロメートルにわたるものである。これは、いままでも山間を流れてきた急流の本曾川が、犬山付近で一度に広々とした土地に出たため、流れが急にゆるくなって、いままでも運んできた多くの砂礫をここに堆積し、扇状の土地をつくったものである。

この大扇状地の扇頂部の標高は四五メートルであり、扇端部は一〇メートルから一二メートルであるから、扇状地面の平均勾配は、二・九度である。

大口町は、ちょうど木の葉の形をして



図1-9 木曾川の氾らん原(大口中学校裏)

自然堤防卓越地帯は、犬山扇状地の末端から、南西約二〇キロメートルの範囲に広がり、県内の濃尾平野の大半を占めている。この地区の自然堤防洲群は大別して、東から、五条川および青木川の沿線に発達し、一宮市東部および岩倉市を経て西枇杷島町へ至るもの、三宅川に沿って一宮市から稲沢市西部を経て津島市にのびるもの、日光川に沿い、萩原町（一宮市）を経て、津島市に至る三群がある。それらは歴史時代の木曾川の分流に沿って形成されたもので県内の濃尾平野の大半を占めている。その堤防には、いろいろな遺跡があり、古代尾張の政治、文化の中心であったことを示している。

大口町の部落の中には、この自然堤防洲群に立地したものがみられる。しかし、五条川のたび重なる改修に流路も川幅も変わってしまい、いまでははっきりしないものが多くなった。

地質

大口町の外坪の東端に洪積台地がみられるが、あとは木曾川の運んできた土砂の推積によってつくられた沖積地である。

この沖積層の下は、鳥居松礫層が横たわっている。

前者の洪積地は、本町の東、小牧市から三河山地の西端にかけて広がる新第三紀層、ないしは古期洪積層の丘陵地帯に接しており、この丘陵地帯を、尾張丘陵と称している。

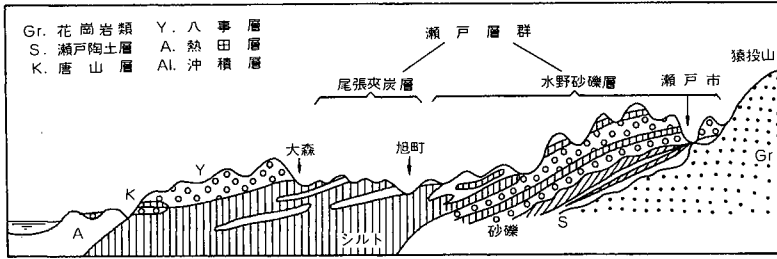


図1-10 尾張丘陵部の地質模式断面

尾張丘陵

尾張丘陵は、濃尾平野の東辺に南北に走る丘陵で、標高は二〇〇メートル以下、地質は新第三紀層と古期洪積層である。

この新第三紀層は瀬戸層群と呼ばれ、下部層は良質豊富な粘土と珪砂を包含する。また瀬戸層群には厚さ約一メートルの亜炭の夾炭層がある。しかし、今日有効に用いられている地下資源としては、窯業、ガラス原料としての粘土と珪砂である。

丘陵地の西縁部には洪積台地がつづき、標高三〇メートルから一〇〇メートルの上位段丘面となっている。下部は唐山層、上部は八事層で、西方へ傾斜して濃尾平野の下部に没入し、それが被圧面地下水の帯水層となるとみられる。

沖積地 町の大部分は沖積地で、扇状地や汜らん原はこの土地の代表ともいえる。木曾川流域には、火成岩が多いため、扇状地を構成する礫層は、おもに古

生層などを流域にもつ河川に比較して粗粒であり、地下水の流動係数は高いが、地表面の保水能力は低い。加えて犬山扇状地は隆起傾向にあるためやや開析扇状地の状態になっており、近世初期に御囲い堤の築堤で木曾川から遮断された旧分水路などは、比高三メートル内外の小開析谷となっている。このような条件も加わって、扇状地面对する灌漑は普及しておらず、今日でも桑園として利用されている所もあり、水田は小開析谷底に帯状に連なる程度である。

なお、犬山扇状地の東部では、クロボク土壌をのせた鳥居松面が地下数メートルの深

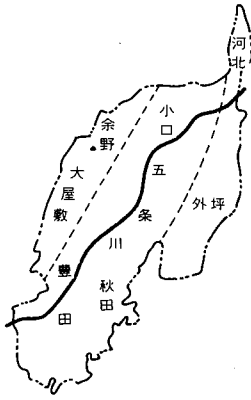


図1-11 土性の区分図
(町資料による)

表1-2 大口町土じょう分布
(町資料による)

種類	田 %	畑 %
砂じょう土	49	54
じょう土	31	40
埴じょう土	20	6
砂土	0	0
埴土	0	0

表1-3 耕土の深さ

大字	大屋敷 余野	豊田 秋田	小口	外坪	河北
深度	18cm	15cm	15cm	12cm	9cm

口に被覆されている。大口町の北替地遺跡層では、このクロボク土壌中からプレ縄文時代の石器類が発見されている。大口町の土性は、じょう土、砂土が主体となっており礫を有する砂土が一部分在するが、耕作には良好な土地であるといえる。

土性

な土地であるといえる。

土質としては、町を大きく東・中・西と縦に三分して分類することができる。

すなわち、東部の外坪、秋田付近はがいて埴質じょう土で、底土が埴土（ねばっこい土）であり、河北は埴質じょう土か、じょう土で赤土は赤色強粘土である。

中央の小口や豊田付近では、表土はじょう土であるが底土は黒色か、赤黄色の粘土であって、表土の厚さは三〇センチメートルから一メートルで粘土層に達する。

西部の余野や大屋敷は、表土、底土ともにじょう土であって、余野の一部には、砂質じょう土やじょう土の地も少なくない。

西部の余野や大屋敷は、表土、底土ともにじょう土であって、余野の一部には、砂質じょう土やじょう土の地も少なくない。

以上をまとめてみると、本町の土性はだいたい五条川以東は粘質にとみ、東部に進むに従っていつそう粘質を加えてくる。五条川以西は、じょう土および砂質じょう土であつて、北部に至るに従つて砂質が漸増している。

本町の河北地区の地層を構成する土質柱状図（名古屋大学地球科学研究室調査「濃尾平野の地下水」）によれば、海拔四〇メートル前後の高さをもつ地表から、①表土が三〇センチメートル・②粘土が二メートル・③砂が一〇メートル・④粘土および砂が一・二メートル・⑤合礫粘土四メートル・⑥粘土六メートル・⑦以下が砂および粘土となつて

いる。

河川 本町の河川は、町の中央を流れる五条川をはじめ、木津用水・合瀨川・巾下川・境川・矢戸川など県管

理河川四川・準用河川三川のほか二〇余の水路がある。

昔から水田の大切な用水源としてあつた多くの小川は、田から田へと流れ、再び下流で流入するいわゆる用水兼排水路となつていたが、水田の基盤整備事業の進行とともに用排水路が分離され多くの河川は改修・整備されて、今日では排水路としての役割りを持つものが多くなり、地内を流れていた小川は、ほとんど姿を消した。

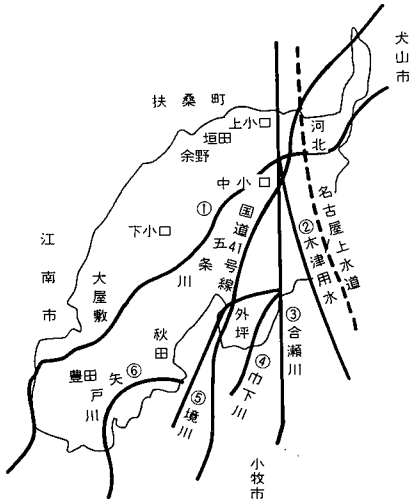


図1-12 大口町のおもな河川